

ぱろす

四季の会・ユーズ・サービス

241号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 新緑の候、先生におかれましては益々御活躍のことと存じます。

大変厳しい時代になってきました。私は、会計人として、物事を「深く、長く、多面的に」考えて参りました。

「深く、長く、多面的に」

価格競争から、価値競争へと、地域の持続的な発展に汗を流す。「深く、長く、多面的に」、これが「経営コーチ」です。会社を動かしているものは、経営者によるリーダーシップと、マネジメントのふたつです。「リーダーシップ」とは、経営をするうえで正しいかを決めることです。「マネジメント」は、その決断を正しく実行していくことです。

原油などの原料価格の高騰と円高。少子高齢化が進み、社会の活力が失われ、経済はグローバル化し、新興国が勃興。競争はますます激しくなってきました。また、人々の価値観は多様化し、経営環境も大きく変わりました。このようなときの経営者は孤独です。目的地は見えず、組織も思いどおりに動いてくれない中、ひとりで重大な決断をし、舵取りしていかなければならないのです。

会計人は、経営者と率直に何でも話ができる環境にあります。銀行や取引先に対し、実態以上に強気の姿勢を見せる経営者でも、会社の実態を知っている会計人に対しては、素直に接するものです。逆に言えば、経営者に対していつでも何でも話ができるのは、会計人くらいしかいません。

「経営コーチ」として、会計人は具体的にどのように仕事をするのか。会計事務所の仕事は、大きく分けるとふたつあります。ひとつは、会社の経営状況を数字から読みとること。正規の簿記に従った月次業務、会計人本来の仕事です。

ふたつは、「決算書の作成。そして、決算診断」です。「決算診断」を用いて経営課題を社長と共に考えることです。非常に大事なことは、「経営課題を社長と共に考える」ことで「社長の会社によくなってもらいたい」という熱意・想いを是非伝えていくことです。自分の会社をよくしたくない経営者は絶対にいないし、自分の会社に、よくなってもらいたいと伝えている皆さんを、絶対に熱く迎えてくれるはずです。

会社をクルマの運転に例えればわかります。運転者は路面状況やスピードメーターや、燃料計器をみながらクルマの日常を運転しながら数字を読みとっています。ところが、日々の会社経営の数字は、中々把握できません。それをしっかりと読みとり経営者に伝えるのが大事な仕事です。さらに速度オーバーしたり、燃料不足になったり、さまざまな問題が発生し、アクセルやブレーキをかけたたり、ハンドルを変な方向に切ったり、事故が起きたら大変になります。

これらの運転をサポートするのが「経営コーチ」だと思うのです。経営者がかかえる問題を聞き、経理を通して対話していくのです。経営者とは信頼で結ばれています。「経営コーチ」は、助手席から経営の舵取りのサポートをしていくのです。

「コンサルタント」は経営者に助言しますが、地図を渡して経営の道筋を示す。助手席には乗ってくれないのです。私たちは、経営者に「深く、長く、多面的に」考え、「経営コーチ」であることに自信を持ちましょう。

「運氣」を装備せよ。そこにあり！

人生には3つの坂がある。1つは上り坂、つまり、万事が好調で何でもうまくいく時である。2つは下り坂、ツキに見放されて様々な困難に陥ってしまう！時である。3つの坂、これは、「まさか」という坂である。この「まさかの坂」はまさに急に出現する。落とし穴のように、油断している時に突然出現する坂である。

「まさかの坂」は、私たちの日常生活の中で、また企業経営の中で時として急に出現する。信じていた人に裏切られ「まさか、あの人がこんなことを…」ということになったり、交通事故や事件などに巻き込まれ、「まさか自分が…」と思うようなことはよくありがちなことだ！「まさかの坂」の例は、新聞やニュースなどで枚挙に暇がないほど人生には付きものといってもよいだろう。

エスカレーターが急停止した後、下り逆回転し、転倒する、「まさか」である。姉弟遺体・知人絶句、不明から約1ヶ月で「まさか、殺されていた」。船場吉兆の本店で食べ残しで使い回していた。「まさか！」。

自殺者や殺人が多い。その本人や家族や友人たちは…。野村証券を舞台にした社員インサイダー取引事件、東京地検特捜部が捜査に入った。野村証券のトップも、また、お客様はまさか？である。

残念ながら、この「まさかの坂」は実に予測不可能である。だからこそ、「まさか」

なのだ。これを回避するのは大変難しい。せいぜい、油断しないことを心の戒めとするしかないのです。ある人の本をみていたら、「人生は闘いである」といわれる。そうかも知れない。その人は「運氣を装備せよ」といわれる。自分の「運氣」を強化することである。高い価値観を持った人との出会い。良き理解者・協力者・適切な助言者や、アイデアやヒントを提供してくれた人もいたかもしれない。そして何よりも最高のタイミングで最高の行動をとれた人だと思う。そのためには、自分を変える。自らの心を変えなければならないと思う。

「心の整理」がある。「整理」は5Sの基本だ。善循環が出てくる。自分が変われば相手が変わる。相手が変われば心が変わる。心が変われば態度が変わる。態度が変われば習慣が変わる。習慣は驕である。5Sの中の驕である。自分で自分の驕を持つ。自分に向かい合っていくのです。自分そのものが善循環になるのだとわかるのです。

致知2008.5で「行を成した人」のことが書かれていました。吉野・金峯山寺千三百年の歴史で満行したのはたった二人。大峯千日回峰行は、それほどの荒行である。その二人目の満行者、塩沼亮潤さんがこの程、『人生生涯小僧のころ』を出版した。平凡な我々に出来るはずもないが、心の持ちようは同じかと思うのです。

この行には一つだけ掟がある。いったん行に入ったら、決して途中でやめることはできないことである。どんな高熱だろうと、足の骨を折ろうと、である。やめる時は携行している短刀で腹を切るか、死出紐という紐で首をくくるかだ。まさに命懸けの行である。

その行の中で感じ入ったことで、一つは、朝起きた瞬間に、心を最高の状態にまでもっていった、ということである。大自然には不測の事態が待ち受けている。不平不満の心をくすぶらせていると、予測せぬ事態に対処できず、命を落とすことになる。そうならないよう、心を百二十点満点にもって行って、どんな事態が起ころうと、ああ、そうきたか、それならこういふ、と対処していった、という。

もう一つは、行に入った最初の頃は、足を痛めたり、体の故障が多かった。それは自分の力を頼み、力任せに歩いてきたせいだと気づくようになる。それからは自然を受け入れ、一步一步「謙虚、素直」「謙虚、素直」と心の中で唱えながら歩くようにした。すると、氷の上を滑っていくような歩きができるようになった、という。

ああなりたい、こうなりたいと思っているうちはだめだったが、自然と一体になった時に、なりたい自分になっていた、ともいう。「人生も行も最も重要なポイントは、人を恨まない、人を憎まない、人のせいにならない覚悟を持つことです。もし行の最中に人を少しでも恨んだり人のせいにしていたら、おそろくいまの自分はない」「現実を受け入れ、愚痴らず、精一杯生きてると、そこに道がひらけてくる。そこに「運氣を装備せよ」になるのかな……と！